



フェロー
太田賢司

創業100周年にあたって

シャープ株式会社は1912年に創業してから、今年で100周年を迎えました。この間、関東大震災や世界大戦など多くの社会変化がありましたが、一貫してモノ作りにこだわり、業容を拡大してきております。生産品目は、鉱石ラジオを嚆矢としたAV機器から、白物家電、情報機器へと広がり、更に近年では、エネルギー、健康、環境等の分野に及んでいます。

このように広がる事業を支える技術の発表の場として、シャープ技報は、1962年の創業50年に創刊されました。当時、早川徳次社長は巻頭言で「技報」による研究発表の蓄積が、研究範囲を広めかつ深耕化し、普く世に貢献する新製品開発につながると期待を寄せ、併せて研究者は、その発表に電子工業界の高学先進各位の批判を仰ぎ、激励を受けて奮起するよう望んでおられます。

今回が通巻104号となるシャープ技報が扱う対象も、シャープの事業拡大に伴い、センサに要求される微弱信号から、エネルギーソリューションで使われる大電力まで、更にはソフトウェアやシステム構築など、いろいろな領域をつないで大きな広がりを見せています。今後も更に、ヘルスケアや教育分野等へのソリューション、サービス事業等、新規事業の創出を念頭に、創意と工夫を凝らした成果の発表が続くものと期待しております。

これまでシャープは何度か困難な局面に立たされ、そのたびに新しい分野を開拓し、柔軟に対応し

て乗り切ってきました。現在もそのような状況にあります。市場の声を聞き、環境変化、ニーズの変化、周辺技術の変化等を的確に捉えた技術開発で、新規事業を創造し困難に対応するという姿勢が強く求められています。

激動のときこそ新たな芽が生まれ育つというのが、歴史の必然です。多くの芽の中から育つもの、育て甲斐があるもの（世に貢献をする物）を柔軟に見つけ出すのが、優れた技術者です。見つけ出した芽を、世に問い、その反響を分析して、自ら技術の方向性を確認していくという意味で、シャープ技報が一つの端緒になればと考えています。

シャープでは、2005年に電子式卓上計算機の先駆的事业が、また2010年に太陽電池の商業化および産業化が、IEEE（米国電気電子学会）のマイルストーンに認定されております。これはIEEEが電気・電子技術やその関連分野における歴史的偉業（25年以上に渡って世の中で高く評価を受けてきたという実績）に対して認定するもので、シャープの独自技術による事業化精神が評価されたものと言えます。

現在のシャープ技報から次のマイルストーンが生まれ、シャープの次の50年、100年の発展の礎が築かれることを願って止みません。